

かみじま歴史探訪

郷土の先輩たちシリーズ④

『坊っちゃん』のモデル？ 中堀貞五郎先生

弓削商船学校の『六十年史』には「恩師の横顔」と題して航海科第十期生（大正五年卒）の神野琢磨さんが、次のように寄稿されています。

「次は中堀先生の番だ。先生は…『坊っちゃん』の中の「うらなり」のモデルその人である由。私等が二年生の時に京都の疎水の辺で文具店を始められた…中堀先生の（松山中学時代の）教え子の三浦先生も…（当時、弓削商船学校の）英語の先生であった。…私等の下級生が小説『坊っちゃん』時代の回顧談を三浦先生に強請んだ（せがんだ）処、その話の中に『修学旅行中、広島宿での出来事だ。寝室見回りの中堀先生が盗人だと布団むしにせられた。処が先生は中から中堀じゃと言われたと皆を笑わせた』…（内は筆者付記）」

弓削出身の大先輩北川喜代磨先生は、広島文理科大の学生時代に、京都まで中堀先生の探訪に行かれたとのことでした。筆者もさきの中堀先生の三人のご子息ならびに中堀先生の松山時代の教え子で、弓削商船学校の教師であった三浦先生のご息女に直面する機会がありました。弓削商船学校の創立八十周年の記念祭（昭和五十六年）のことです。弓削着任前の履歴書には次のような記載が見られました。

原籍 愛媛県越智郡今治町大字今治村二百六十九番地
当時 松山市大字湊町六十番戸

寄留士族 中堀貞五郎

現職 愛媛県立松山中学校嘱託教員

証書 一 明治十年十一月二日 愛媛県伊予師範学校ニ於テ小学師範科卒業

（中略）



中堀貞五郎
明治18年2月22日
東京で撮影

一 明治二十年十月一日 東京物理学校

ニ於テ物理学化学専科卒業証書ヲ享受ス

今治藩の士族の家に誕生し、伊予師範（愛媛師範）学校を卒業して奉職しますが、決意して上京、東京物理学校に進学。卒業後は帰郷して、明治二十一年九月に伊予尋常中学校（松山中学校）の教師となります。この学校に帝大出の漱石が着任したのは明治二十八年でした。翌年まで勤務、友人の子規との交友も深めます。『坂の上の雲』が物語っているように。

一方、中堀先生は、着任してから間もなく結婚しています。その相手は、目下、NHKの「坂の上の雲」に登場している子規の妹の律でした。しかし、この結婚は間もなく解消されます。『子規全集』の年譜には明治二十二年六月に結婚、翌年の四月に離婚とあります。中堀先生のご子息のお話では、兩人の愛情問題からではなく、正岡家の事情かららしい。彼女の間もなく上京、子規の介護に専念しています。

その後、中堀先生は松山藩士族出身の太田厚（松山中学校の教頭）さんの妹と結婚しました。でも、この女性の間もなく病死、その後、愛媛師範学校を卒業して松山の外側小学校に勤務していた河部門枝さんと結婚しました。のち文部大臣となった松山出身の安倍能成は、その自伝『我が生い立ち』の中で次のように回想しています。「…河部という薬屋…（この）家の娘になる人が…私たちの小学校の先生になっていた。…血色のよい、落ち着いてしやかな先生だったが、後に私が（松山）中学で地理を教わった…中堀先生の後妻になられた」

中堀先生が夫人の門枝さんとその間に生まれた誠二さんを伴って弓削に着任したのは、明治三十八年でした。その後、弓削で二人の男子に恵まれました

が、大正三年には退職します。その際、向かったのは郷里の今治ではなく京都でした。末っ子の孝志さん（旧制三高、京大卒、のち島津製作所重役）は、その自分史『レ・メモワール』（昭和六十二年、太平堂刊）に次のように記されています。「大正三年…一家をあげて京都に移った。その時父は五十七歳、母は四十四歳、誠二兄（旧制三高、京大卒、のち鹿児島大教授）は十二歳、忠三兄（海軍機関学校卒、のち海軍中佐）は七歳、私は三歳であった。今更就職のあてもなく、幼い三人の子供を連れて…その頃の両親の心情を察する時、いつも私の目頭は熱くなる。さてその引越しの途、尾道の旅館に一泊したが、尾道の街の電燈の明るさにはびっくりした。」当時の弓削は、まだランプの生活だったのです。

この種の逸話を愛媛新聞の「四季録」（平成五年四～九月）に連載したことがありました。その記事を目にされた朝日新聞の編集委員（当時）溝口瑛氏は、同紙の「溝やんの話の横丁」（平成五年四月十六日）に、「判明？『うらなり』君のそれから」と題して次のように書かれています。「漱石は同僚たちの履歴や性格を巧妙に差し替えて『坊っちゃん』を創作したと見るのが適切だろう…」皆さまはどのように？

（写真は『今治手帳』一九九四年春号の拙論より）



忠三
孝志
太田厚氏
夫人
門枝
誠二
貞五郎
（大正2年頃、弓削で）

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授

村上 貢 稿